

〈共同研究報告〉

『太陽』における《朝鮮観》

——ある〈奇妙な情熱〉について

三 谷 憲 正

一、はじめに——関心の所在

日本の近代とは、被植民地の人々からしたら、侵略の歴史であることは、論をまたない。

例えば、朴春日（パク・チュンイル）氏の『近代日本文学における朝鮮像』（未来社刊 初版一九六九年一月）は、「朝鮮人」や「韓国」がどういう作品にどのように描かれていたのかを博搜して、近代の文学者の視線を批判的に検討している。この著書が非常な労作であることは言うまでもない。しかし、その見方というものを辿って行くと、不思議な思いがしてくる。

「成立当初から極端に軍事的・侵略的な性格をおびた明治『新』政府の対アジア政策——その設計図の具体的な実践であり、それをもっとも典型的な実践ちでしめしていたのは、ほかならぬ対朝鮮政策であった。」

と言うが、本当だろうか。その後『増補版』<sup>(1)</sup>が出版された際の「増補版によせて」は「一九八五年七月一日」という日付を持つていることからわかるように、初版からかなりの年月が経っているはずなのだが、「かつての日本は、『征韓論』以来一貫して、自己の侵略と植民地支配を合理化するために、『内鮮一体化』を喧伝

してきた。現在の『日韓運命共同体』論は、その再版にすぎない。」（傍線は引用者、以下同じ）  
という、観点は変わっていない。

また、姜東鎮（カン・ドンジン）氏の『日本言論界と朝鮮 1910—1945』<sup>(2)</sup>（法政大学出版局 一九八四・五初版第一刷）も韓国併合から解放までの長い歳月にわたって、新聞・主要雑誌の記事を追いかけた、膨大な作業量を伴う仕事の結実であることは一目瞭然である。これもまた、極めてすぐれた労作であることは疑いない。しかし、その貴重な資料提示とは別に、どのような資料を持って来ても、次のような総括がなさ

れていることに気が付く。

(第一章第一節より)

「歴史の偽造」(P10-3) 「奇怪な論理」

(P10-52) 「植民地似而非幸福論」

(P12-1) 「全く見えすいた虚言」(P12

-11) 「詭弁を弄して」(P13-2)

「論理で粉飾」(P13-4) 「全くの虚偽

の論理」(P13-58) 「真相を隠蔽」

(P14-1) 「白黒を顛倒した論理」(P14

-51) 「主権の強奪を隠蔽」(P15-5

4) 「虚偽の論理」(P16-51) 「牽強

付会のごく論理」(P17-6) 「虚偽

の弁」(P17-7) 「全くの虚偽」(P17-

56) 「虚偽の弁」(P17-55) 「虚偽

の論理」(P17-53) 「論理を弄する」

(P19-1) 「巧妙な論理」(P24-56)

「一時的便法」(P24-52)

(以下略)

つまり「日帝」の言うことは、一つとして、「真実」はない、全てこれ、「虚偽」のみという見方である。

あるいはまた、海野福寿氏の岩波新書

『韓国併合<sup>(3)</sup>』は「慣例無視の外交文書」の節で、

「とくに朝鮮に対しては、当初から侵略

の志向をのぞかせていた。その根底に

あるのは江戸時代に醸成された朝鮮蔑

視にまみれた歴史観である。」

という。つまり、日本の近代というのは最

初から対外進出を目指した侵略の野望を持

っていた、と言うのである。が、本来にあ

の徳川の時代に朝鮮を蔑視した歴史観が醸

成されていたのだろうか。恐らくは、国学

系統の発想を指しているのだとは推測され

るが、しかし、また他方では朝鮮通信使へ

のひときかたならぬ評価もあったはずである。

また、「明治の当初から侵略の志向をのぞ

かせていた」という捉え方も素直には頷け

ない面がある(詳細は後述)。ともあれ、日

本の近代というのは、アジア地域に関して

は全否定の観がある。

しかし、果たして、日本の近代というのは

は「帝国主義によるアジア侵略の歴史だっ

た」という総括だけで済まし得るのだろうか

か。これは日本というものが全く悪の産物であるという視点である。そして当然悪があれば、一方には善がある。従ってこの見方は、弱者が善であり、強者が悪である、という勧善懲悪の図式に簡単に移行することになる。

私には、むしろ、そのように概括してしまふことによって、何か非常に大きなものを見落としてしまっているような気の晴れない疑問が付きまとっている。つまり、そのように全部を否定してしまった時に、あれほど熱狂的に衝き動かしていたものの実体が見えなくなってしまう、ただ「悪かった」というだけで済ましてしまうことになりはしないか、という危惧である。あたかも、夢遊の中で犯した犯罪を覚醒した現在謝るかのような乖離がないだろうか。それというのも、先に述べたように「悪の帝国日本が朝鮮さらに中国などに対し、その野望をむき出しにして侵略して行った」という単線的概括では、一見奇妙に見える、訳のわからない、いわば日本の近代の暗部

に潜む逆説」を見落としてしまう危うさがあるように思われるからである。

この「日本の近代に潜む逆説」とは、例えば、大井憲太郎の「大阪事件」などが好例かもしれない。この事件とは、

「明治十八年（一八八五）に朝鮮の独立運動支援と国内の立憲政体樹立運動とを結合させようと計画した事件」

であり、

「彼らは朝鮮にのりこんで保守派の大官を暗殺し、独立派の政権を確立して、

清国から独立させ民主的改革を行い、

それを日本国内の改革の糸口としよう

と考えた。」（以上、『国史大辞典（第

二巻）<sup>4</sup>）

と言われるものである。この事件は未遂に終わったが、今後の日本の動きはほぼこのような線に沿って行く。しかしなぜ日本の国内の立憲体制を確立するための運動が、朝鮮の高官を暗殺することにつながってしまったのか、という奇妙な問題は依然残されている。『国史大辞典』では、「自由民権運

動の本筋から外れた運動であった。」とい

う評価がなされている、がそれでいいのだろうか。最近になると、『日本大百科全書』<sup>5</sup>

3では、「近年、本来の民権運動の一環として再評価する動きもある。」と解説もさ

れている。見通しとしては多分こちらの方が真実に近づけるのではないかと思われる。

あるいはまた、与謝野鉄幹の『東西南北』や『紫』などの抒情も一つの例に挙げられよう。『東西南北』中の短歌に次のよ

うな詞書が付されている。

「京城に秋立つ日、槐園と共に賦す。時

に、王妃閔氏の専横、日に加はり、日

本党の勢力、頓に地に墜つ。」

さらに『紫』の「日本を去る歌」では

「弱きを扶けて義のある所火をも踏む

は／市井の無頼長兵衛も知りたり／二

十七八年の役／何んが故に父祖の子孫

を殺して／高麗の半島の山河／空しく

北夷の蹂躪に委したる」

と歌っている。この「義のある所火をも踏

む」は、人口に膾炙されているあの「人を

恋ふる歌」の一節にも既に使われていたフレーズである。

このように歌われている抒情をどう理解したらいいのだろうか。ただひたすら日本の防衛のためにとか日本の国益のためとかの理由で、所謂侵略の先兵として事を行っている、とは考えにくいのではないか。

ところで、司馬遼太郎氏は『坂の上の

雲』<sup>7</sup>の中で善か悪かの二項対立を次のよう

に述べている（「日清戦争」の章）。やや長

くなるが、大事な視点だと思われるのであ

えて引用しておきたい。

「日清戦争とは、なにか。『日清戦争は、

天皇制日本の帝国主義による最初の植

民地獲得戦争である』という定義が、

第二次世界大戦のあと、この国のいわ

ゆる進歩的学者たちのあいだで相当の

市民権をもって通用した。あるいは、

『朝鮮と中国に対し、長期に準備され

た天皇制国家の侵略政策の結末であ

る』ともいわれる。

というような定義があるかとおもえば、積極的に日本の立場をみとめようとする意見もある。『清国は朝鮮を多年、属国視していた。さらに北方のロシアは、朝鮮に対し、野心を示しつつあった。日本はこれに対し、自国の安全という立場から朝鮮の中立を保ち、中立をたもつために朝鮮における日清の勢力均衡をはかろうとした。が、清国は暴慢であくまでも朝鮮に対するおのれの宗主権を固執しようとしたため、日本は武力に訴えてそれをみごとに排除した。』

と二つの国家像を提示したあと、次のように述べている。

「前者にあつては日本はあくまで奸悪な悪にのみ専念する犯罪者のすがたであり、後者にあつてはこれとはうってかわり、英姿さつそうと白馬にまたがる正義の騎士のようである。国家像や人間像を悪玉か善玉かという、その両極端でしかとらえられないというのは、

いまの歴史科学のぬきさしならぬ不由であり、その点のみからいえば、歴史科学は近代精神をよりすくなくしかもっていないか、もとうにも持ちえない重要な欠陥が、宿命としてあるようにもおもえる。」

「他の科学に、悪玉か善玉かというようになわけかたはない。たとえば水素は悪玉で酸素は善玉であるというようなことはないであろう。そういうことは絶対にないという場所ではじめて科学というものが成立するのだが、ある種の歴史科学の不幸は、むしろ逆に悪玉と善玉とわかる地点から成立してゆくというところにある。」

私も基本的にはこのような立場から見えないかと、本当は何があつたのか、が判らないと考えている。言わば、殺人事件が行われた時、どういう動機で、何が原因で、どのような状況の中で、どのようになされたのか、ということが見えて来ないと思われるからである。

## 二、「解放」の論理

現在、日本帝国主義として総括される、かつての大日本帝国の国内の思考はどのような論理で動いていたのだろうか。彼等の論理は、今となつては不思議なことだが、日本の朝鮮侵略を、旧制度による塗炭の重圧から人民を解放し、近代文明の恩恵に浴させることだと考えていたようだ。これは、誰が見ても「絶対正義」であると思われた。そしてこの大義は「天命」「天職」として日本に与えられたと考えていた。その意味では、日本軍は、「解放」軍であつた。

そして、もう一つは、ヨーロッパ（白人）に対抗するために東洋は団結しなければならなかった。しかし、まだアジアの他の国々は前近代的制度のなかで呻吟していた。そこでは、日本が「亜細亜の盟主」になって、欧米の植民地化から、「アジアを守る」という形が考えられたようだ。ここにも、列強の侵略から、アジアを「解放」するという志向が見えてくる。



恐らく、日本があれほど、朝鮮に固執した理由は、冷徹な利害の軌道をひた走る「帝国主義の侵略」というだけでは片付かない、エモーショナルなものを多分に含んでいたように思われる。確かに、「現在」という結果から過去を照射する、いわば「神の視点」においては、そのようであったかもしれない。しかし、日本の近代が持っていたのは、単なる帝国主義国家のリアリズムだけではなかった。むしろそのリアリズムを遂行して行く、原動力として、以下に述べる「奇妙な情熱」があったように思われる。

その「情熱」とは、隣国の災難を見捨てない、義勇軍の「インターナショナルリズム」であり、また、他国の民に同情し、憐憫を催す「ヒューマニズム」と言ってもいいだろうか。そして、これらには恐らく、「自由」と「独立」とそして「恋愛」がない交ぜになったものだったのではなかったか。

確かに「大日本帝国」は当時の朝鮮を始

め各地を植民地とした。実体としては何のことはない、やはり「植民地」であった。しかし、思想は、収奪をこととする欧米流の「植民地」を作ろうと企図していたのではなかった、と考えた方がわかりやすい。むしろ、西洋の植民地から、アジアを「解放」することを図っていたという点からすると、我々の父祖たちは実はとんでもないことを夢想していたのではなかったのか。そのような眼差しを『太陽』で見てみたい。

### 三、『太陽』の論理——日清から日露へ

先学の諸氏は、「植民地化」に一貫して突き進んでいった、という。果たして、そうだったのだろうか。

#### 川崎三郎「朝鮮問題」

川崎三郎の「朝鮮問題」(明治二八年七月号 第一巻第七号)は、日清戦争の後始末として下関条約が調印され、踵を接して三国干渉が起こった、その後に発表されている論文である。

彼は、当時の朝鮮策を五つに分けて検討している。<sup>9)</sup>

第一の『朝鮮独立論』は先に草した『朝鮮革新策』を引用し、

「〔略〕畢竟するに此論は、朝鮮の事情に暗く、猶朝鮮を買い被り居ることを免れず、故に仮令其論、時俗に入り易しと雖、此の如き平板姑息の策にては、今日の朝鮮を復活せしむること能はざるべき也」と、(略)要するに朝鮮の独立と云ふは、未来の論題に属し、到底之を今日の朝鮮に望むべき所に非ざる也、」

として、川崎は否定的に述べている。

そして、第二の『朝鮮中立論』は、

「中庸の見なるが如しと雖、是れ白耳義の如き、瑞西の如き、邦国にして、始めて能くすべき也、(略)却て東邦の紛擾を招くの本と為り、我国の不利、言ふべからざるものあらん、」

で、これも成り立ち難いとしている。

しかし、注目すべき意見は次の第三の

「併呑論」である。

「朝鮮併呑論」、快は、則ち快なりと雖、時機、已に後れたるを奈何せん、仮令之を併呑するの時機なきに非ずとするも、併呑は我帝国の志にあらざるべし、

と言っているのは、その場限りの「虚偽の弁」ではなからう。

第四の「朝鮮分割論」は「東邦の関門を割きて、所謂強国に付すべけんや」であるからこれできない、という。とすれば、残る方策としては、

第五の「朝鮮保護論」である。

「夫れ朝鮮を扶掖して其内政を革新し、以て東邦の平和を永遠に保護するは、日本の天職ならずや、」

「扶掖」とは、字義的には「たすける。力をそへる。扶助」(大漢和)の意味であるが、それにしても、一体何が「日本の天職」なのだろうか。

このように、朝鮮を助け、東洋に平和をもたらす、という発想は、「明治二九年三

月五日号」(第二巻第五号)の政治欄の「朝鮮の政情」において三宅雪嶺が述べている中にも登場して来る。

「我れは義を以て朝鮮を扶掖す、若し外より我を妨げ我を排する者ありて、而して世界有眼の士我を以て非とす、是れ即ち命なり、然れども帝国の力未だ尽く傾注したるに非ず、我が秘法を以て朝鮮を起し、仁術の光榮を東洋に輝かすは、実に大国民の職分なり、」

雪嶺は「義」という尊いものから当時の朝鮮を「扶掖」、つまり救援するのだという。そして、「仁」を朝鮮に施していく、これを「大国民の職分」だと言う。多分、彼等は本気でこのような「義」や「天」や「仁」を信じていた、と思われる。ここに、結果から見た「見え透いた虚言」を読み込むことはむしろ難しい。

これは、日露戦争期の記事ではあるが、「柴四郎」の「韓国の将来」(明治三七年九月一日号 第十巻第十二号 後出)にも、

「既に日清の戦役に、世界に声明せし韓

国の独立扶植あるのみ、弊政の改良あるのみ、是れ日本の天職なり。今回露国との大戦も其の大半は韓土の保全自衛のみ、」

という一つの意見が見て取れる。

ともあれ、川崎三郎が「朝鮮問題」で述べている日本のスタンスは、併呑は不可。保護が良策」というものであった。

中西牛郎「朝鮮に関する外交問題」

このように、当時の日本の朝鮮に対する態度は、彼の国の植民地化へ一路邁進していたのではなかった。「明治二八年八月号」(第一巻第八号)の「対韓策」(政治欄)では、政府を叱咤し、

「各政党も亦去年以来決議せる方針(注…朝鮮の独立を扶植する)を確定するの意を鞏うしたり 政府が一時朝鮮を持てあぐみて、之を放棄せんとせしは実なり、」

と言う。あるいは、また、前出三宅雪嶺「朝鮮の政情」は、

「我鋭意内政の改革に着手し、見んごと

独立国の実相を備へしめんと為し、  
昨年の中頃よりして稍々革新の希望な  
きを察し、其秋冬よりして今年にかけ

て益々之を慮り、特に最近の変事(注…  
閔妃虐殺の事件)に接してより、宜し  
く万事を抛擲すべしと唱ふる者さへ生  
ずるに及びぬ、抛擲を唱ふるは、固よ  
り外国の異議を憚りて然るものありと  
雖も、又実に朝鮮の希望なき国たるを  
熟知したるに由らんか。」

と、その間、様々な言説のあったことを述  
べている。

更に、中西牛郎は「朝鮮に関する外交問  
題」(明治一九年四月五日号 第二巻第七号)  
で、次のように意見を吐露している。

「略」朝鮮たるもの独立の精神なく実  
力なく、自ら胥ひて亡滅に陥るに及ん  
では、帝国亦之を奈何ともする能はず、  
帝国は一片の友誼を除くの外、朝鮮を  
保護するの義務なく、亦帝国自家の存  
亡を賭けても朝鮮の亡滅を救はざる可  
らざるの理由なし、」

この主張は、現在から見ると、極めて新鮮  
に映る。中西は、続けて、

「朝鮮が其独立を保つと其独立を失ふと  
は、是れ朝鮮自家の存亡に属し、帝国  
の権利利益に於ては毫も損益する所あ  
らず、然れ共其初帝国が誘導して其独  
立を列国に紹介せしもの、豈にその独  
立の名実共に失はんとするを見て、一  
片義侠の精神なからんや、亦豈多少友  
誼の精神なからんや、是れ朝鮮の独立  
を扶植するに於て幫助を与へたる所以  
なり、」

とも言う。「毫も損益する所」がないにも  
かわらず、なぜ「帝国」は関与するのか、  
といえは、それは「義侠」でありまた「友  
誼」からだ、とその理由を述べている。

「縦令朝鮮にして他の強大国に併吞せら  
るゝも、亦或は朝鮮自ら好んで之に隷  
属するも、帝国の権利利益を毀損せざ  
るの新事情現出するに当りては、帝国  
何ぞ必ずしも朝鮮のみに恋々たらん  
や、」

「どこかの大国(ここでは露西亜を意識して  
いると思われる)に併吞されようがどうし  
ようが放っておいたらどうだ、という主

張は、しかし、どこか突き放した、他人行  
儀の冷たい肌触りがその底辺に蟠っている  
ように感じられる。つまりこの『太陽』と  
いう舞台の上に繰り広げられる、朝鮮に対  
する《情熱》的な論調の中にあつて、「豈  
必ずしも自国の存亡を賭けても朝鮮の亡滅  
を救はざる可らざるの理あらんや」という  
言説は、いわば「隣家がどうなろうと自家  
のことだけ考えていればよい」というもの  
であり、その態度は奇妙に利己的に見えて  
くるのだ。

#### 大庭寛「古の朝鮮と今の朝鮮」

さて、では当時の日本は、これから「侵  
略」することになる朝鮮の「民」をどのよ  
うに見ていたのであろうか。

「明治二九年七月二〇日号」(第二巻第十五  
号)では、「法学士大庭寛一」が「古の朝  
鮮と今の朝鮮」とを比較して、「今日の廃  
頽を見るに至れ」る様子を歴史的に述べよ

うとしている。その中で注目すべき点は、次のような箇所である。

「行政の職司、現状に依りて之を觀すれば則ち營邑の官（監督と邑庁の官吏を謂ふ）は民に取るに最も苛酷にして民の爲めに益する所は毫も之れ無きなり、其帶ふる所の官職は多々之れ有りと雖も其爲す所は実に淺鮮にして是れ亦民の爲めに尽すに非ずして皆自ら爲めにする所ありて然るなり」

「若夫れ半島の現状を視察せば、匪徒乱を作して蜂起し、盜賊群を爲して横行す、良民は則ち其財を失ひ其命を損し其土地を奪はれ其家宅を焼かる、」

「胥吏の良民を苦むるや実に盜賊の害より甚しきものあり」

これらの主張の力点は王朝末期の民衆にある。まさに、苛政は虎よりも猛なり、を感じさせる報告である。先に述べた中西牛郎に限らず、このような隣国の虐げられた「民」をそのまま、我関せず、で見つめぬふりができるのか、という意見はあちこち

に散見できるものである。

例えば、既に「明治二八年八月号」（第一卷第八号）の「政治欄」には、「井上伯の朝鮮文化論」なる談話が掲載され、「伯爵彼の国文化の退歩せる所以を説ける」として、「大同価なる制」が紹介されている。王朝盛時に煙草盆が二十五錢であり、今は二円五十錢になっていたとして、それをおつての値段、即ち十分の一の値段で買い上げてしまうのだという。

「宛かも物品を召揚げらるゝと異ならず、故に人民は、辛苦して良品を作れば作る程自ら損をするに過ぎず（略）故に人民は皆以爲らく、辛苦して良品を作るは愚の極なりと、相率ひて懶惰逸居す、（略）農民は良米を作るを欲せず、好んで粗悪の米を作り以て召揚げの厄を避けんとするなり、」

つまり、「懶惰」の原因はこの政治にあるというのである。

#### 加藤政之助「対韓策」

さらに、「明治三十七年五月一日号」（第十

卷第七号）、加藤政之助の「対韓策」（論説欄）中、「財政の紊乱及官吏の腐敗」の節では、

「其任地に赴くや、一に所定の税金を中央政府に納むるを以て、其義務を終りたるものと心得、恣に各種の増収入を謀り、民を虐げ懷を肥すを以て目的とす、故に国民納税の過半は、彼等の私腹を満すの資と爲り、（略）官吏は其得る所の給料、其出す所を償ふに足らざるが爲に、一層の腐敗を重ね、」  
という状況が描き出されている。

これらは、果たして、先行研究が言う「植民地化への合理化」であろうか。彼らの文章から感得されるのは、隣国の民の桎梏の下にあえぐ悲惨な姿である。

無論、先学の主張する、「植民地化」はこうした様々な周波数を持つ「情熱」を吸い上げ、「日本帝國主義」に相応しく整調し、その上で自国の権益と防衛のため、他国を侵略して行ったのは事実である。だが、ここで立ち止まって注視してみたいのは、

これほど隣国朝鮮に関わろうとする、一群の人々の、憧れにも似た「情熱」である。

### 肥塚龍「日露協商論」

例えば、「明治三〇年四月五日号」(第三卷第七号)の「衆議院議員 肥塚龍」の「論説『日露協商論』」(政治欄)は、

「朝鮮半島王国は我天皇の大詔に於て彼を独立せしめ、彼を扶植すべきを宣下あれせられしにあらずや」

と日清戦争の詔勅を根拠にし、「朝鮮の独立を扶植すと誓ふたる我帝国政府」が違約するはずがない、という。これは、後年、逮捕された安重根の「伊藤博文の罪科十五ヶ条」の発想に近い。ともあれ、肥塚は、

「若し万一彼(注…朝鮮)にして外債を起す如きことあらば、我は独立扶植の詔旨に従ひ、利子の高低を問はずして、彼を扶助すべし、」

と主張している。利害を度外視してまでも、「扶助」しようとする「熱情」は一体どこから起こってくるのだろうか。

### 柴四郎「韓国の将来」

ところで、日清戦争を過ぎ、次の日露戦争の段階になると、「保護論」から「合併論」へと進んでくるように思われる。関妃暗殺にも関わったことのある柴四郎(「佳人之奇遇」の作者東海散士)の「韓国の将来」(「明治三十七年九月一日号」第十卷第十二号)は、先ず、「韓皇の半面論」を掲げ、

「韓城の姦雄韓皇の半面を写し」出した後、「韓皇父子をして全く疑惧猜疑の念を脱却せしめ、自由に往来遊歴せしめ、」

本は父国、韓国は母国、父母相愛の念を深厚するを根本の急務と為すべし。」という。そして、甲論乙駁している潮流を四つに分けて、述べているのが注目される。

一つは「日韓大帝國合併論」である。

「乙論者曰く、任意連合して一大帝國を建設し、以て列強と角力馳騁すべし、」

「日本の採る所の方策は、普国の独逸連邦の小国に於ける盟主の如く、東洋の盟主となり、東洋永遠の平和と利益とを保全せざる可らず。而して能く平和的に列強環視の目前に実行すべきは、

日韓両帝室と、両人民相互の任意的意思の疎通を以て、永久の幸福と安寧とを大基礎として、果決勇断せざる可らず。」

無論、歴史の示すとおり、一九一〇(明治三三)年の「韓国併合」は、「任意連合」ではなかったし、「両人民相互の任意的意思の疎通」にもならなかった。しかし、多分彼等は本気でそう思っていたように見える。なぜなら、

「元より我日本帝國の如き仁義と正理とを以て、東洋の衰頹せる弱邦中に聳え、共に俱に文明の誘導啓発に力を尽くし、亜細亜の盟主を以て任ずるもの、漫りに他列強の所為に習ひ、弱小なる友邦を併呑すべけんや。」

だからである。ここに窺われるのは、欧米列強の帝國主義によるアジア蚕食を、滑稽なことだが、亜細亜の国々が横に「連帯」して防ごうという思想である。それは、例えば次のようなところにも見て取れよう。

「初め欧州の文化が希臘を経て光輝を發

せし如く、吾人は日本の旧文明の発祥が、三韓より伝来せし歴史を有せり。

恰も希臘の圧制に奮起独立の旗を揚げ

し時、欧州の義士仁人が救援せしが如く、韓の半島も独立自由の旗を竿ぐる

の日には、孤劍義に赴くの宿志あり。」

悲惨を通り越してむしろ滑稽ささえ感じられるのは、オスマン・トルコ帝国の支配から独立しようと戦った（一八二一—二九

ギリシアと、かの朝鮮を同じ平面上に置いているからであろう。彼の国の独立への動きを強行に弾圧したのはどの国だったのか。確かに結果から逆照射すると、これは

混乱以外の何物でもないかもしれない。しかし、当時の人々の一群は本気で「孤劍義に赴く」としてゐたのではなかったか。

一体その「情熱」とは何だったのだろうか。

先の川崎三郎の論の中にも出て来ていたが、「韓国永久中立論」は、「論」としてはあったようである。「合併論」に続き、柴四郎こと東海散士は「元来日本人が、恰も古来より朝鮮を征服して、付庸国と為せし

が如き觀念を抱くことが、第一対韓策根原を誤る歴史なり。」として、「中立論」を紹介している。

「列強の公平なる者と相謀り、高麗半島を以て、瑞西の如く、白耳義の如く、永久局外の保全国と為し、鴨綠豆満の二江を以て、清露の相侵犯せざる境界と為し、兵備を撤し、殖産に務めは生民の慶福如何ぞや。」

スイスやベルギーがその後、中立を保持し得たかどうかは措くとして、こうした論がかつてあったというのは、歴史の可能性として注目できることであろう。

しかし、政治はあくまで現実の力学である。三つ目の策として、「總督政治論」が登場して来ている。

「夫れ韓の貴族や、腐敗汚習其極点に達し、佞諛を以て智者と為し、詐欺を以て外交と為し、淫逸を以て性命と為し、誅求を以て職責と為り、煙草を吹きて悠遊し、色を漁し、惰眠を貪はり、明日の貯を務めず、所謂醉生夢死する蠢

爾たる奴輩なり。」

「断然京城に總督府を立て、右に劍を提け左に協定の左券を握り、遠くは六波羅政治の京師に於けるが如く、近くは伊太利の羅馬法皇の宮殿に対するが如く、朝廷の名のみの主權は神聖にして侵さず、宮中の行為は目を掩へ耳を塞いて見ざるべく聞かざるべし。」

「賄賂政治と宮司窃盜を嚴罰し、人民をして納税と裁判とに私なく、且つ公平に貴族官吏の掠奪誅求を防止するの救主にして、真に安寧幸福なりと実見自覺せしむること、」

結局は、韓半島は彼等自身に任せておけな、という主張である。「總監府」が出来るのはこの論から一年以上も後のことではあるが、既に「總督」による政治（支配）が俎上に載っていることがわかる。

最後の論は「政治放棄実業獲取論」というものである。要は、

「韓廷を思ふ勿れ、韓人を見る勿れ、唯其肥沃なる南北六百里東西百三十余里



の土地と、其上に棲息する一千万有余の労働人民と、港灣に富む一千七百四十哩の沿岸線を目標とすべきのみ、(略)我が年に繁殖する人々の移住地とすべきのみ、」

というのであって、経済的な観点でのみ関わればいい、という趣旨となっている。

東海散士はこれ以外に「韓皇讓位論」、そして「亡命客利用論」を名のみ挙げている。それらを含め、ここでどれが一番いいか、という選択はしていない。ただ、後世の我々はその後の歴史が「総督政治論」から「韓皇讓位論」へと繋がって行ったのを知っている。しかし、この時期多様な可能性の渦巻く中で、取り返しつかない日韓の不幸な関係は形作られていったという点は考慮しておくべきだと思われる。

鬼谷先生「朝鮮に於ける半上落下の政策」

二ヶ月後の「明治三十七年一月一日号」

(第十卷第十四号)では、「鬼谷先生」が「朝鮮に於ける半上落下の政策」(論説欄)で、次のように当時の国論を要約している。

「何事に関しても兩個の極端は存せず。

朝鮮を以て一個の琉球たらしめんとする者は、右の極端也。朝鮮の為に戦ふたる仁義の国は、之をして名実共に独立国たらしめざるべからずとは、左の極端也。然れど此極端論者を除きては、朝鮮を我保護国たらしめんとするは、朝野を通じたる国論なりと云ふを得べし。」

「琉球」のように版図に組み入れる、つまりは「併合」することも極端だが、名目上も実際上も独立国とするのも極端である、という。

神鞭知常「満韓に対する経営」

また、神鞭知常は、翌月の「明治三十七年二月一日号」(第十卷第十六号)の「満韓に対する経営」(論説欄)で、「併呑」策を否定的に見ている。「韓国は十分に保護せざるべからず」とし、

「然るに今に至て韓国を併呑せんとするは、世を欺罔し正義に背き戦旨に悖るの甚だしきものと云はざる可らず、我

国は古来正義公道を重んずるの国なり、今更焉ぞ之に背くの行動を敢てせんや。故に韓国に対しては、其の独立保全を確証し、之を誘掖して今日恰も未だ小童にあるが如き国体をして、成人の境に達せしむべし、」

しかし、やはり進歩党の衆議院議員らしく、「誠意容れられされは最後の手段に訴ふるも可なり」とし、「我が国運を全ふする為め、自衛権を応用して、韓国を併有せざる可らず」と「併合」の可能性を示唆している。

日露の戦時下において、朝鮮への関わり方は、それまでの清国からの「独立」を主張していた時期と異なり、「保護」策が主流となっている。その傍らに「併呑」も可能性として選択肢に含まれるが、しかし、まだ「王朝」を排してまで、「併合」しようという意見はあまりない。このような傾向はこの時期の大勢だったと思われる。

例えば、「明治三十九年一月一日号」(第十



二卷第一号)の「論説 如何にして妹邦を

治めん乎」で竹越与三郎は、

「我が政府は既に紛々たる世論に惑はず、朝鮮を併呑するの愚策を避けて、之を保護国とするに満足したと云ふのは賀すべきことではある」

と「保護策」を挙げている。

鳥谷部春汀「韓国皇帝と伊藤統監」

あるいは、また「明治三十九年八月一日号」(第十二卷第十一号)に掲載されている鳥谷部春汀の「人物月旦 韓国皇帝と伊藤統監」は次のように述べている。

「侯は日本の韓国を保護するは之れを亡ぼす所以に非ずして、却つて其の興国の要素を開発せしむる所以なるを韓民に教へむとせり。侯は文明式の行政と、平和の経世術とに依りて韓国の秩序を整調し、韓民の生活状態を一変し、以て韓国の歴史に新性格を賦与せむと企てたり。侯は領土拡張の主義を含める覇道を排斥して、誠心誠意に王道を以て李家の天下を綏むずるに外ならざる

を皇帝に領会せしめむと努めたり。」

無論、こうした言わば、一見理想的に見えるものが、この後、一つひとつ現実によって裏切られていくのは事実である。しかし、こうした一連の時代の言説は、なにもかもその場限りの、ずるい帝国主義の「ごまかし」や「甘言」や単なる「糊塗」ではなく、奇妙なことに「誠心誠意の王道」だと時代の思潮が信じていたようなのだ。一皮剥けば、欧米列強の植民地の在り方と代わりばえがしないにも関わらず、なぜ、そのように信じていたのだろうか。その答えの一つはこの鳥谷部論が如実に示してくれているように思われる。それは、「領土拡張の主義を含める覇道」と「誠心誠意の王道」との対比である。前者は白人種による植民地を意味し、後者が我が大日本帝国の在り方だ、という理解の仕方である。

彼は続けて言う。

「蓋し日本政府の対韓策は、二十年来一貫して終始渝る所なく、常に正義と友誼とを以て、韓国の平和及び文明を発

達せしむるに力を致したると共に、又韓国に於ける日本の権利及び利益を保護するを旨としたりき。」

この後の歴史を知る現在の、例えば韓国の人々からすれば、確かに「嘘偽」以外の何物でもないこうした主張の裏側には、絶えず欧米列強の姿があった、と考えられる。

ともあれ、一九〇五(明三八)年九月にポーツマス条約が結ばれ、韓国に対する日本の優越権が鞏固になり、その具体的現れとして、同年十一月に「第二次日韓協約(乙巳条約)」が発動し、外交権が剝奪されるところにも、統監府が設置される。それから二年後の一九〇七(明四〇)年の七月、皇帝高宗による「海牙密使事件」が発覚し、それを契機として、高宗の退位、併せて韓国軍の解散がなされ、「日帝」の包囲網は徐々に狭められていく。そして「第三次日韓協約」(八月)が結ばれてとうとう外交権のみならず、内政権までもが奪われて行った。

確かに年表を眺めていると、一步一步着

実に日本の帝国主義はその野望を実現して行ったように見える。しかし、それは結果からみるとそう見えるのであって、歴史のその時々<sup>その時々</sup>の選択は対処療法<sup>対処療法</sup>の積み重ねの結果である場合が多かったように思われる。

### 無署名「対韓策の根本的解決」

例えば、先の「海牙密使事件」を論評する形で、「明治四〇年八月一日号」(第十三卷第十一号)の「時事評論 対韓策の根本的解決」(無署名)は、

「日本の保護権を蹂躪せむとして密使を海牙に派遣したる韓国皇帝の行動は、京城の政界をして旋転窮まりなき幾幕<sup>幾幕</sup>の悲劇を展開せしめたり。」

と憤っている。それにつけ加えて、

「伊藤統監は(略)或る場合に於て、日本人よりは寧ろ韓国人の為に忠実ならむとするの傾向ありと諒せられたりき。要するに彼れの韓国政治は日本本位に非ずして韓国本位なりと認められたる状なきに非らざりき。伊藤統監の韓国に尽す所以のものの斯くの如く懇切を極

めたるに拘らず、彼れの高義は終に韓国の君臣に徹底するを得ずして、既に今日まで幾たびか前皇帝と関連したる陰謀の韓国に繰り返へされたるを見たりき。其の不信不義の責むべきもの何ぞ唯た一二にして止まむや、況むや今回の密使事件あるに於てをや。」

とその「不義」をなじっている。そこで、出てきた意見が、次のようなものである。

「既往の経験に依れば、韓国に対しては最早単に指導啓沃の手段のみに依頼すべからず、別に断じたる高圧の手段によりて禍源を杜絶するの挙に出づるの外なし。」「案ずるに仮りに今日の機会に於て韓国を日本に合併することありとするも、露国恐らくば日本に故障を申し込むが如きことなるべし。況むや其余の列国をや。」

当時の日本側からする、あたかも「悪女の深情け」のごとき、「愛憎」は措くとして、結局「合併」しかない、という判断をこの時点においてしているのが注目される。

さらに、翌月の「明治四〇年九月一日号」(第十三卷第十二号)は、事実上の「韓国特集号」と言っても差し支えないほど、朝鮮半島の記事で埋まっている。

まず、「時事評論」(無署名)で、「独立なき国家」「半島の王室」「亡国の民」「日本の対韓外交」「軍隊解散の教訓」といった小見出しを立て、二一頁にわたり、韓国を論評している。特に、「両班政治」の章では、「党派分裂表」まで掲げ、事細かく解説している点が注目される。

また、「人物月旦」では、「近代文明に呪はれたる韓国太皇帝」の見出しで、鳥谷部春汀が、

「近代の国際競争を指導する勢力の最も優越にして確実なるものは、科学を以て基礎としたる各種の経綸なり。所謂近代文明の主義なるものは是れなり。偏見及び旧思想に司配せらるゝ社会、有機的組織の発達せざる国家、世界の平和及び進歩に協力せざる国民統治者、人類の共同生活と相容れざる排外的精

神等は、皆比(ヒキ)の主義の敵とする所なり。

という「文明主義」を採用すべきことを挙げてゐる。

### 大隈重信「韓国問題の経過と根本的解決」

さらに、同号「論説 韓国問題の経過と根本的解決」で「伯爵大隈重信」は、明治以降の外交問題を論じて次のように述べてゐる。

「日清の戦も其原因は又韓国である、何時でも韓国が禍の根源である、支那の日本に示威的運動を爲した原因も韓国である、韓国が御維新と共に日本の政治の上に付纏つて、政治家を苦しめ、国民を苦しめ、時としては内閣の大破裂を惹起し、維新の元勳などが、そのために一生を誤つたと云ふやうなことも源を糺せば韓国である、韓国が日本に讎(ウラ)爲すこと実に甚だしい。」

「維新以来殆ど三十有余年間は常に韓国に因つて日本が苦しめられたのみならず、其間に支那とも戦ひ露西亞とも戦

ふと云ふ如き不幸が続出したが、何時も韓国が原因となつて居るのである。」

今日、このような言説を読むと奇異な感じを我々が持つのは、単にその後の歴史を知っているためばかりではない。既に、当時の明治人の根本にある感覚が理解できなくなっているからだ。誤解のないように断つておかなければならないが、日本が韓国を苦しめたのではなく、逆に韓国によつて日本が苦しめられたのである。一体その感性の内側にあるものは何であらうか。ともあれ、この論では、彼は「合併」説を紹介しつつ、その方向を暗示する。

「今後に残つて居るのは、如何にして韓国を治むるかと云ふ問題だけである。ところが其問題を論ずるよりも、(略)もう少し手強く出て、朝鮮を合併してしまつた方が宜いなど論じて居る様である。」

こうした「合併」論議が出てくるのは、やはり「海牙密使事件」を契機としてゐるやうに思われる。

### 小川平吉「日韓協約に就きて」

無論、同号「日韓協約に就きて」の記事(衆議院議員小川平吉君談)<sup>(13)</sup>が次のように伝えていることは確かであろう。

「仮令此密使事件が無かつたと致しましても、他の機会を捉へて、根本的に韓国の政治の実権を、我に収むると云ふことを図つたに相違なからうと思はるゝのであります、」

そしてまた、一群の政治家たちの思惑も「合併」を視野に入れていたやうである。続けて、小川は次のように言う。

「我々同志の人々の案は、第一日韓両国合併の事 第二は皇帝が位を罷めて、統治権を我に委託させるやうにしたいと云ふやうな趣旨でありました、それで合併と云ふことは些と過激の議論のやうに聞えますけれども、併しなから日韓両帝国は、膠(ヤマト)膝(マツ)(注…膠漆の意か)の如く到底離るへからざる密接なる關係を有つて居る」

しかし、その責任者であつた統監伊藤博文

はこの時期、どのように考えていたのだろうか。

「然るに統監の考は頗る明瞭且つ穩当でありまして、第一合併に対する意見としては、兎に角韓国は、古来久しく立派な国を成して来つたのであつて、台湾の如き寄留人民の寄り集つて居る国とは違ふのであつて、之に対する遣方如何に依ては、随分後々に少なからぬ禍を貽すと云ふことを考へなければならぬ、第二には、合併に依て生ずる我國の負担と云ふことをも考へなければならぬ、是等の困難を冒しても、強て今直ちに合併する必要があるや否と云ふことは考へものであると云ふ趣意で、即ち韓国の国情並に我の事情を斟酌せられて、反対の意見を漏らされたのであります、」

聞き書きではあるが、しかし、この時期の統監伊藤は「合併」にはまだ慎重であつたようである。

ここから約三年後、小川たち「同志」の

主張したとおり、韓国は「併合」される。だが、単に支配地域として大日本帝国の版図に組み込み、収奪を事とする、という植民地的発想だけでは解きにくい謎を私達に投げかけている。それは例えば、次のような言説である。

「我國の人も、是までの如く韓国若くは韓国人民と云ふものを、相手の位置に置いて觀察せずに、我が兄弟である、若くは我の子である、或は我の妻であると云ふやうな考を以て、何所までも之を愛し、且つ行くと云ふことの考を持たなければならぬ、之を相手の位置に置いて、従前の如く、一方を傷めて我を利すると云ふやうな念を持つて居つてはならぬと考へます、」

「百年千年の後、何所までも彼国民と共に、彼を引連れて進んで大陸に發展して行かなければならぬのでありますからして、之を他人と視て他人扱をする」と云ふことは、慎んで避けなければならぬことであると考へます、」

何が「我が兄弟」「我の子」「我の妻」だ、ということとはたやすい。さらに「彼を引き連れて進んで大陸に發展」する、という滑稽さを笑うことも簡単である。これは「虚偽の論理」であると同時に「真実を糊塗するための論理」であり、前者は、例の悪名高き「日鮮同祖論」の敷衍化を意味し、後者は帝国主義的な中国侵略に加担させることを意味している……という分析を加えることも難しくはない。しかし、もし彼等が真顔でこのように考えていたと仮定したら、どうなるだろうか。多分そのように問題を設定してこそ始めて、日本という国の（近代に潜む奇妙な逆説）が見えてくるように思われるのだ。

#### 四、おわりに——〈情熱〉の行方

以上述べて来た所をまとめると、次のようになる。一つには、明治の始めから侵略の野望を満たすため、日本の帝国主義は「併合」へと一路驀進していった、という見解についてである。これは結果から見

そう言っても差し支えない、という一つの

喩であるかのように思われる。<sup>(14)</sup>確かに最終

的にはそのようだったとしても、しかし、

その間の揺れ動きとしてのプロセスだけは

迫っておくべきであろう。多分、論調の変

化は次のように考えられる。即ち「日清戦

争」(二八九四 明二七)までは「独立」が

主流であるが、この戦いに勝利すると、

「保護」が政策として浮上する。この時点

から日露戦争(二九〇四 明三七)までの

一〇年間はほぼ「保護国」化するという主

張がなされる。が、日露戦争に勝利し、こ

とに「海牙密使事件」を経ると俄然「合

併」論議が沸騰してくる。やがてそれは現

実のものとして一九一〇(明四三)年八月、

「韓国併合」が決定的となる。確かにこの

ようにかつての論調の変化を辿ると、あた

かも一つの意志によって、大日本帝国は一

路邁進していたかのように見える。だが、

『太陽』の朝鮮関係の記事を追いかけて見

ると、そのときどきの幾つかの要因によっ

て、右に動き左に回り、かなりの紆余曲折

を経ているのがよくわかる。

二つには、特に興味深く思えるのは、こ

れまで見てきた父祖たちの「奇妙な情熱」

である。即ち、隣国の民がどのようなであ

うが自国さえ良ければそれでいい、とは考

えなかった「奇妙な思い入れ」についてで

ある。多分、明治の彼等は、明治維新以前

の状態にある隣国朝鮮の人民を旧制度から

「解放」し、近代の文明の恩恵に浴させる

ことを、「天職」ともまた「天命」とも思

っていたのではなかったか。その根底には、

こちらからの一方的で脂っこいのだが、し

かし不思議な「共感」や、「共苦」に似た

感情が窺われるのである。日蓮宗国柱会の

信者だった宮澤賢治は「農民芸術概論綱

要」の中で、「世界が全体幸福にならない

うちは個人の幸福はあり得ない」と言った、

この世界と個人とのシンパシー。しかし、

この「世界」を「亜細亜」に替え、「個人」

を「日本」に置き換え、亜細亜が全体幸福

にならないうちは日本の幸福はあり得な

い」としたらどうなるだろうか、という連

想さえ感じられる。

そして三つ目には、欧米列強の帝国主義

からアジアを守るという志向である。この

場合、日本が「盟主」となるが、しかし他

の国例えば隣国朝鮮もその戦列に友軍とし

て参加するのが当然である、とする発想で

あった。そのためには旧態然たる朝鮮の体

制を「革新」し、近代国家へと脱皮させる

必要があったと彼等は考えたようなのだ。

しかし、朝鮮人自身の手でそれがなし得な

い、という判断が下されると、結局は日本

の版図に組み込み無理矢理の「連帯」を作

ろうとした。無論、朝鮮の独立を最も阻害

したのは他ならぬ日本自身であったのだが。

日本の近代の持つこのような「逆説」は、

朝鮮人民の福利の増進を謳いながら、逆に

人々を不幸に陥れた、という点にも見られ

る。

無論、以上のような「情熱」を現実の政治の場で実体化すると、併合前なら「日本人を大臣として送り込め」ということにな

るし、併合後なら義兵の運動に弾圧を加えることになる。私はこの論考で、明治の日本を美化するつもりもないし、また日本の過去の免罪化を謀る意図もない。また昨今の「自由主義史観」とやらの組みするつもりもない。ただ、かつての日本があれほど隣国朝鮮に関わった〈情熱〉の意味を考えてみたただけである。あの〈危険な情熱〉はその後、「八紘一字」となり「五族共和」と姿を変えた。やがて「大東亜共栄圏」は霧消し、後には深い傷跡ばかりが残った。しかし、〈情熱〉は一時的に消滅したかのように見えながらも、戦後を潜り、形を変えて、今現在も誰もが反対できない衣装をまとい、「絶対正義」として生き続けているように思えてならない。

## 注

- (1) 増補版第一刷は一九八五年八月刊。  
(2) 「叢書・現代の社会科学」中の一冊である。なお引用は一九八七年八月第二

刷による。

- (3) 新赤版三八八 初版一九九五年五月。  
(4) 吉川弘文館刊 第一版昭和五五年七月。但し、引用は第一版第三刷による。  
(5) 小学館刊 初版一九八五年四月。但し引用は二版第一刷による。  
(6) 落合直文の実弟、鮎貝房之進<sup>あゆがいのふみよしの</sup>。乙未義塾塾長。  
(7) 但し引用は文春文庫第二巻（一九九二年七月 第三〇刷）による。  
(8) 川崎紫山<sup>かわさきしざん</sup>一八六四—一九四三。明治から昭和前期にかけてのジャーナリスト。水戸の生まれ。名は三郎胤鸞<sup>たねよし</sup>。大蔵省勤務を経て、東京曙新聞社、大阪の大東日報社で記者生活を送る。西郷隆盛の征韓論に共鳴し、『東洋策』（明二十一年）を著す。明治二十六年・二十七年の朝鮮東学党の乱には、頭山満らと天佑俠を後援。日清戦争時には、従軍記者として出かけた。その後、『中央新聞』『信濃毎日新聞』の主筆、その間頭山満・内田良平らと国粋主義の陣営にあり、三四年、黒竜会の創設に参画。また一進会にも加わり、しばしばアジアの諸問題に画策奔走した。昭和十八年没。（『国史大辞典』参照）  
(9) 日清戦争当時の外務大臣であった陸奥宗光も『蹇蹇録』第一章で「明治二十七年八月十七日閣議」に、甲「独立国」、乙「保翼扶持」、丙「日清両国においてこれを担保」、丁「中立国」の四案を提議した旨を述べている。  
(10) 肥塚龍<sup>はづまりゅう</sup>、兵庫県出身。代議士、東京府知事、秀英舎監査役等を歴任。大正九年没。（『大日本人名辞書』第二巻参照）  
(11) 竹越与三郎<sup>たけしよとさぶろう</sup>の号。明治・大正期の史論家、新聞記者、政治家。  
(12) 嘉永元年丹後に生まれる。内務省、大蔵省官吏を経て、衆議院議員となる。進歩派の領袖として政界に重んじられた。東洋問題のために奔走したが、明治三八年没。（『大日本人名辞書』第一巻参照）  
(13) 帝国大学卒業後弁護士となる。近衛篤磨<sup>あつ磨</sup>のもとで東亜同文会、対露同志会などに参加。立憲政友会所属の代議士。司法大臣として治安維持法制定に参画した。昭和十七年没。（『日本大百科全書』参照）  
(14) 上外垣憲一氏も「明治前期日本人の朝鮮観」（国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第一一集平六・九）で、



「……日清戦争なり、日韓併合なりはたしかに重大事件であつたから、それを終点として歴史を叙述することは間違ひではないが、もしもすべての明治における日韓関係の歴史叙述がこの二つを終点として行われるならば、それは一種の歴史に対する偏見を生むであらう。この二つだけを目標として日韓関係が存在していたわけではないからである」。そして「日本人の朝鮮問題に対する考え方は、意外と多様性があり、単に侵略の対象、あるいは、清国との覇権争奪の場としてしかこれを見ないといったものとはかなり隔たりがあるように思われる」、そのような例を数多く示している。